

日本脂質生化学研究会

本会では、脂質生化学の分野における最新の研究成果を広く普及し、
研究者間の交流を促進することを目的として、本会報を発行する。
本会報は、脂質生化学の分野における最新の研究成果を広く普及し、
研究者間の交流を促進することを目的として、本会報を発行する。

本会報は、脂質生化学の分野における最新の研究成果を広く普及し、
研究者間の交流を促進することを目的として、本会報を発行する。
本会報は、脂質生化学の分野における最新の研究成果を広く普及し、
研究者間の交流を促進することを目的として、本会報を発行する。

本会報は、脂質生化学の分野における最新の研究成果を広く普及し、
研究者間の交流を促進することを目的として、本会報を発行する。
本会報は、脂質生化学の分野における最新の研究成果を広く普及し、
研究者間の交流を促進することを目的として、本会報を発行する。

日本脂質生化学研究会

会 報

1980年1月

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

55年度会費払い込みのお願い

- 昭和55年度会費2,000円を、3月末までにはさみ込みの振替用紙でお払い込みください。

本年度の講演集の作成に必要ですので、明日にせず、今日お払い込みください。

- 振替用紙は1人1枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口に備えつけの用紙をご利用ください。

会費送付先

振替番号 東京4-91400

日本脂質生化学研究会

- 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金1,000円+昭和55年度会費2,000円=合計3,000円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。
- 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。
- 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり或いは、他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。

事務局 東京都板橋区加賀2-11-1(〒173)

帝京大学医学部第一生化学教室

日本脂質生化学研究会事務局

TEL (03)964-1211

内線 2320

2321

第22回日本脂質生化学研究会 研究集会のお知らせ

- ① 場 所 岐阜大学医学部（岐阜市司町40）
期 日 1980年7月14日（月） 15日（火）
実行委員 高橋 善弥太 教授（岐阜大学医学部第1内科）

- ② 研究集会参加費用
参加費 2,000円を予定しています。

- ③ 懇親会
研究会第一日の発表終了後にいたします。
会 場 岐阜会館（会場より徒歩3分以内）
会 費 2,000円を予定しています。

宿泊案内

○宿泊案内：御希望の方は各自、できるだけ早目に直接御申込み下さい。

（う飼いのシーズンのうえ、夏休みに入りますので例年大混雑します。）

(1) 共済組合関係

	住 所	TEL	一泊2食	人数
① 岐阜宿泊所卓山荘	〒502 岐阜市長良橋福土山3533	(0582) 31-5998~9	2,950~	76
② " 岐山会館	〒500 岐阜市日の出町5-12	63-7111	3,900~	165
③ " 長良川会館	〒500 岐阜市青柳町5-4	53-1622	3,400~	62
④ 華陽会館	〒500 岐阜市早田東町2-1	32-4485	3,100~	25
⑤ 岐阜保養所ながら荘	〒500 岐阜市御手洗町	62-6042	2,500~	44

(2) ホテル・旅館

① 岐阜グランドホテル	〒502 岐阜市長良川畔	(0582) 33-1111	} 10,000~ 13,000円程度 （食事別）
② 長良川ホテル	"	32-4111	

③ 長良川ハイッ	〒502 岐阜市長良山先 69-2-3	(0582) 94-2511	} 5,000円程度
④ 岐阜フシントンホテル	〒500 岐阜市金町 8-20	65-4111	
⑤ すぎ山	〒502 岐阜市長良川畔	31-0161	} 10,000 ~ 13,000円程度 (食事付、1部屋2 名以上の場合)
⑥ 十八楼	"	65-1551	
⑦ 長良館	"	32-7117	

その他ビジネスホテルもあります。

※注 会場近くになると岐阜市内に宿を探すのは困難とのことです。名古屋から名鉄で40分、更に会場までタクシーで5分程度です。

観光案内

○ 観光案内

岐阜市および近郊の主な観光地を御紹介します。

- * 市内：岐阜城、岐阜公園、大仏像、崇福寺(信長)、常在寺(道三)
 - * 近郊：千本松原、養老の滝、伊吹山、関ヶ原、谷汲山、横蔵寺、掛斐
峽、郡上八幡、白川郷、下呂温泉、飛騨高山、犬山城、明治村
- なお、う飼の見物については各宿泊所に問わせて下さい。一般乗合船もあり、遊船事務所(〒500 岐阜市湊町1-2 TEL0582-62-0104 ~5)で受付けています。

55年度日本脂質生化学研究会総会および 幹事会のお知らせ

- ① 総会 55年7月15日(火)午後の研究発表の始まる前に研究会会場で開催いたします。
- ② 幹事会 55年7月14日(月)昼休憩時におこないます。幹事の皆様には別途ご案内を申し上げます。

研究集会発表演題の募集

昨年の第21回の研究集会では ①短時間発表 ②長時間発表 ③シンポジウムの区分で募集をおこない、結局、時間的制約から多数の演題をシンポジウムから一般演題に、また一般演題から簡明演題に移って頂き研究集会を終わらせました。

この形式、実施の方法にもいろいろ問題はあると思いますが、もう一年同じ方式で集会をして、会員諸兄のご意見を集約したいと思います。

① 発表演題の申込み

次の形式で発表演題募集をいたします。

(A) 短時間発表 発表8分 討論5分

(得られた結果を公表することに意義があり、簡明なもの)

(B) 長時間発表 発表15分 討論7分

(研究経過が長く、考え方を説明する必要のあるもの、また内容が著しく豊富なもの)

(C) シンポジウム 主題(リポタンパク質の基礎と臨床)

発表20~25分 総合討論時間を設ける予定です。

申込締切り 4月25日(金) 必 着

いずれも綴込みの申し込み用紙をご利用ください。

会場および時間配分の関係で(A)(B)(C)の区分についてご希望にそえない場合があります。また申し込み演題数によっては(A)(B)(C)それぞれの持ち時間を若干変更しなければならない場合もあります。そのような場合、できるだけ早くご連絡申しあげるつもりですが人手の都合で遅れる場合もあります。できるだけ柔軟なご対応をお願いいたします。

第21回 日本脂質生化学研究会 講演申込用紙

② 講演集原稿の送付

発表申し込みを頂いた方に、講演集用原稿用紙をお送りいたします。原稿は必ず黒インキまたは黒ボールペン、あるいは黒でタイプ印書して **5月20日(火)必着**で事務局宛お送りください。原稿用紙は、例年の如く、1枚1433字詰4枚を原則とします。どうしても超過する場合は、事務局までご連絡ください。

尚、原稿用紙一枚目の、発表者所属、氏名の下に5行(190字)の要約を枠
囲みして書いてください(昨年、一昨年の講演集をご覧ください)。

③ 研究発表

研究発表は、講演集を十分に活用してください。スライドは講演集に記載できなかったデータ、写真などに限って使用するより工夫してください。スライドの数を講演時間1分につき1枚以下に制限いたします。尚、会場は講演集が読めるように明るくしておきますので、スライドはコントラストの強いものを準備してください。

いずれかに○印

受付番号 ※
(本会記入)

A 発表 8 分 討論 5 分
B 発表 15 分 討論 7 分
C シンポジウム

申込者氏名

連絡先 〇

電話・市外局番	局番	番号	内線
03-3581-1111	1111	1111	1111

演 題

氏名(所属)

講演要旨

A full page of blank graph paper. The grid consists of small squares formed by dotted lines. There are approximately 20 columns and 20 rows of squares. A solid black border runs along the left and bottom edges of the page.

「受け取り」の必要な方は、宛名を明記した葉書を同封してください。

会 の 活 動 状 況

① 第21回日本脂質生化学研究会研究集会

第21回の研究集会は、梅雨あけの富山市、電気ビルを会場とし、長谷純一氏（富山医科薬科大・教授）のお世話で7月21、22日の二日間、開催された。

第20回に引きつづき、研究発表形式を摸索する試みの一つとして、短時間発表（簡明演題）と長時間発表（一般演題）とシンポジウム演題に別けて募集し発表をおこなった。

全演題数106、（前年比+19）と予想を上まわる発表希望がよせられたために、シンポジウムから一般演題へ、一般演題から短時間発表へと変更をお願いした演題数も相当数におよび、発表技術の面でご迷惑をおかけしたむきもあったが、簡明演題52、一般演題44、シンポジウム演題10という形で、全発表希望演題を収容した。

シンポジウムは野島、野沢、渋谷、三氏の司会で進められ、一般演題、簡明演題共に多くの座長の方々をわずらわして、研究発表、討論が進められた。毎度のことであるが、討論を受けて立てない演者が居たり、非常に理解しにくい質問があったりすることはさておいても、一連の質疑応答が終結しないうちに、他の内容の質問が寄せられて討論内容が散漫になってしまうような場合も見受けられる。座長の識見、技倆の問われる場合も散見された。

今大会では、第一日の最後に特別講演が一般公開の形でおこなわれ、鈴木義之氏（東大医、小児科）によって“脂質の遺伝病”という演題によって、いくつもの脂質にかゝわる遺伝病、それに対するアプローチの努力が紹介され、お世辞めきで、電気ビルの講堂を埋めた聴衆に多大の感銘を与えた。

尚、この二日の会期に先だつ20日（金）夕刻、長谷実行委員の企画で、富山市杉谷の富山医科薬科大学の新装の講堂で、前夜祭として公開特別講演会が開催され、野沢義則氏、遠藤 章氏がそれぞれ“生体膜脂質の調節機構”“コレステロール合成阻害剤ML-236Bの発見から臨床まで”と題する講演をおこなった。

長谷教授をはじめ、準備のため何度か東京迄、足をお運びいただいた小橋助教授、集会の運営に直接たずさわられた教室スタッフの諸兄弟に心からお礼を申し上げたい。第一日夜の懇親会、23日の立山ツアーなど面倒な準備に大変な時間をさかれたことを思い、重ねて深謝する次第である。

② 第21回日本脂質生化学研究会総会

54年7月22日(日)12時45分より富山電気ビル講堂に於いて開催された。内容は以下の通りである。

1 挨拶 原会長、長谷実行委員長

1 53年度事業報告承認の件 植田幹事

54年2月発行の会報に記載された53年度事業並に会計報告について承認を求め承認された。

次いで舟橋会計監査より会計監査の結果、異常なき旨報告され承認された。

1 54年度事業経過報告 植田幹事

。 会員の構成(54年度末の確定数値に改めてある)

正 会 員 588名(前年比+11)

新入会員 30名

退 会 者 19名

賛助会員 21社 22口

味の素株式会社、日本油脂株式会社の二社より退会の通告があった。

名替会長 1名(安田守雄氏)

名替会員 5名(数野太郎、山添三郎、木村雄吉、山崎三省、永井淳爾氏)

。 会の運営

従来どおり、年1回の会報発行と、1回の研究集会を開催し、それに伴う講演集を発行することをおこなう。

会報(20頁)は54年2月15日に出来あがり直ちに発送された。研究

集会は、予定通り54年7月21, 22日に開催され、現在進行中である。

また講演集(453頁)は7月5日に刷り上り、直ちに会員に発送された。

54年度予算(別掲)およびその執行状況について報告、いずれも了承された。

1 幹事会よりの提案承認の件 山川幹事

。 幹事増員の件

次の9氏に55年度よりの幹事(任期4年)を委嘱する旨提案があり承認された。

赤 沼 安 夫	猪 川 嗣 郎	井 上 圭 三
遠 藤 章	奥 山 治 美	小 野 輝 夫
脊 山 洋 右	野 沢 義 則	武 藤 泰 敏

。 会計監査選任の件

第20回総会の席上、役員改選に際して舟橋三郎氏に54年、55年の会計監査をご依頼すべきところ、ご欠席であったため、取り敢えず54年1年間の会計監査役をお引き受け願うことで総会の承認を得ていたが、55年も引き続き会計監査をお引き受け頂ける旨、ご本人の承諾が得られたので、舟橋会計監査の任期を一年延長したい旨提案され承認された。

。 名替会員推薦の件

舟橋三郎氏の永年に渉る本会への貢献から、本会名替会員にご推薦申し上げる旨提案され承認された。

。 人会金徴収の件

研究集会の時に加入し爾後連絡のとれなくなる加入者を防ぐため、55年度より新たに人会をする人から人会金(1,000円)を徴収する旨提案され承認された。

。 55年度研究集会・開催地・実行委員の件

55年度の研究集会開催地を岐阜とし、医学部第一内科高橋善弥太教授に実行委員をお願いする旨提案され承認された。

次いで同会場に於いて、54年度千田奨学金贈呈者の発表と贈呈がおこなわれた。

贈呈者

岩 森 正 男 氏 都老人研生化学
「カングリオンドマッピング法による膜系
カングリオンド分子種の多様性の解析」

③ 54年度幹事会

54年7月21日(土)正午より、富山電気ビル4階会議室で開催され総会への報告事項、提案事項が審議された。(主な審議事項は、②項の内容を参照願いたい。)

④ 54年度在京幹事会

54年12月11日(火)赤門学士会館で午後5時30分より開催され、54年度の決算および55年度の予算(別掲)、55年度の運営方針を協議した。

54年度決算の状況から見て、55年度も会費値上げはおこなわずに、会報の発行、研究集会の開催、講演集の発行の事業をおこなうこととした。それに伴う55年度予算を決定し、岐阜で開かれる幹事会に提案し、総会の承認を求めることとした。

また56年度研究集会は、近畿大、林 陽教授に実行委員をお願いする旨、次の幹事会に提案し、総会の承認を求めることにした。

55年度末をもって任期の満了する会長、庶務幹事、会計監査および幹事(55年より就任する9人の新幹事を除く全員)の改選は、次の幹事会で協議することとした。

出席者 原 一郎 山川民夫 山田晃弘 飯田静夫
(順不同) 児島英也 赤松 稔 金子 弘 村松敏夫
 原島圭三 野島庄七 植田伸夫 (島崎弘幸)

昭和54年度決算および55年度予算

収 入 の 部 項 目	5 4 年 度		5 5 年 度 予 算
	予 算	決 算	
正 会 員 会 費	1,033,000	1,088,950	1,088,000
賛 助 会 員 会 費	230,000	240,000	210,000
講 演 集 売 上 げ	70,000	218,100	100,000
広 告 収 入	600,000	763,900	600,000
寄 付 金	0	0	0
利 子	3,366	5,056	5,056
雑 収 入	0	0	0
人 会 金	0	0	15,000
小 計	1,956,366	2,316,006	2,018,056
前年度よりの繰越金	821,035	821,035	1,268,953
計	2,757,401	3,137,041	3,287,009

支 出 の 部 項 目	5 4 年 度		5 5 年 度 予 算
	予 算	予 算	
研 究 集 会 補 助	100,000	100,000	200,000
会 報 製 作 費	120,000	117,600	140,000
講 演 集 製 作 費	1,500,000	910,000	1300,000
旅 費	50,000	56,900	50,000
郵 送 料 通 信 費	270,000	247,634	400,000
事 務 用 品 費	20,000	259,200	20,000
会 合 費	50,000	67,464	80,000
謝 金	30,000	10,000	30,000
事 務 経 費	60,000	60,000	100,000
雑 費	10,000	2,500	10,000
総 会 経 費	0	33,410	30,000
小 計	2,210,000	1,868,088	2,360,000
次年度への繰越金	547,401	1,268,953	927,009
計	2,757,401	3,137,041	3,287,009

講演集に関するアンケートの結果

毎年同じように講演集を作ってきましたが、これでよいのかどうか、二、三気がかりな点について、富山の学会会場でアンケートにご解答願いましたのでその結果を記します。このアンケートは無記名でしたが、幹事の諸先生からは記名で解答を頂きました。

		幹 事	一般会員
○ 一演題4 ページは	長すぎる	1	14
	丁度よい	28	49
	もっと長く	0	4
○ 「わく囲み」の抄録は	必 要	28	55
	不 要	1	9
○ 英文抄録を	つけよう	3	11
	必要なし	11	21
	統一しなくてよい	15	27
○ 本文も英文で	よいではないか	10	24
	はない方がいい	17	29
○ 別刷を作った方が	よ い	7	20
	不 要	18	42
○ 広告	全くない方がよい	0	3
	この程度ならよい	29	54
	多すぎる	0	

以上の如き結果でしたので、従来どうりの講演集でよいというのが大勢だと判断いたしました。

尚、幹事の方の意見と一般会員の方の意見が、ほぼ同じであることを見いだしました。

(植田 記)

海外で開催される脂質関係の学会

- 国際油脂会議 (International Society for Fat Research ISF) とアメリカ油化学協会 (AOCS) の合同学会 (ISF-AOCS の第 2 回 Joint-Meeting) が 1980 年 4 月 27 日～5 月 1 日、New York で開催されます。詳細は、東京医科歯科大学教養部 原一郎教授にお問い合わせください。

連絡先 0473-(72)-1136(代)

- 第 22 回国際脂質生化学会 (ICBL) が 1980 年 5 月 26 日～28 日 イタリアで開催されます。

トピックは

1) コレステロール、胆汁酸代謝

2) リボプロテインリパーゼ

3) 栄養上の必須脂肪酸の問題

で各々 5 名の招待講演者による話題提供が予定されて居り、あと、この領域に関連した極く限られた Short Communication と Poster Presentation とを受けつける模様です。但し申し込み締切りが 1980 年 3 月 1 日ですから、発表ご希望の方は大至急事務局迄、電話でご連絡ください。極めて限られた数の申込タイプ用紙があります。

連絡先 03-964-1211 内 2320

- 第 7 回 "Drug Affecting Lipid Metabolism" の国際シンポジウムが、前項の ICBL に引きつづき 5 月 28 日～31 日 同じ場所で開催されます。

シンポジウム

1) リボプロテインレセプター

2) 胆汁酸

3) 薬剤と脂質—臨床経験

4) 薬剤と血小板—臨床経験

ワークショップ

- 1) リボプロテイン代謝と脂質代謝に及ぼす薬剤の影響
- 2) 脂質低下剤の作用機作
- 3) 脂質低下剤は脂質代謝のみに働くか
- 4) 脂質を低下させる食餌

が主として招待講演者によっておこなわれますが、公募もされています。これも申込用のタイプ用紙が2枚だけ手許にありますので、ご希望の方は電話で事務局迄ご連絡ください。こちらの締切りは2月15日です。

連絡先 03-964-1211 内2320

会員の方々から

第21回国際脂質生化学コンファレンスを顧みて

東大・医・第一生化 脊山 洋 右

昨年の会報に第21回国際脂質生化学コンファレンス(ICBL)出席旅行のご案内という広告が掲載されていましたが、IUPAC, 国際神経化学会、国際複合糖質シンポジウムが相前後して開催されたこともあって、約30名の参加のもとにグループツアーが実現し、そのうち7~8名の者が西ドイツのケルン市で開かれた本学会に出席しました。

20ヶ国から250名の参加があったとはいえ、ヨーロッパ以外からの出席は25名で、その半数が日本人であったことを考えると、国際会議といってもかなり偏りのある集りであったといえましょう。テーマも予告の段階から絞られ、脂質生化学全般というわけではありません。

学会見聞記なるものは既に蛋白質核酸酵素(24巻, 14号, 69~71, 1979)誌上に書いてしまったので、今更の紙もありますが、学会の雰囲気だけでもお伝えできたらと思ひ筆を採りました。

学会発表は8月30日から9月1日までの3日間で、3会場を使って招待講演15と一般講演112題が行われたわけですから、参加者の数といい、内容といい、日本の脂質生化学研究会に毛がはえた程度の規模ですが、朝8時半から夜7時近くまで、ぎっしりとプログラムが組まれていました。殊に3日目は土曜日にもかかわらず、夜まで発表が行われ、結構多数の者が残って討論していたのには感心しました。

招待講演は45分、一般講演は15分で、全て口頭で行われたのが特徴で、この会に引続きDampで行われた第5回複合糖質シンポジウムがポスターセッションを大巾に取り入れたのと好対照でした。

ICBLは原則として毎年開かれ、会の性格はその年の主催者に一任されてい

るとの事で、今回はケルン大学の Stoffel が Molecular properties of lipids というテーマを掲げて、物理化学的な側面が強調されていたという印象を受けました。

脂質の機器分析を総ざらえしてみようというのが一つのトピックで、発表の1割近くはNMRのデータの解釈をめぐる議論が行われた。プロトンはもとより、 ^{13}C 、 ^2H や ^{31}P 等の核種も使われ、分析対象も純粋の化合物としての脂質だけではなく、生体膜に組みこまれた脂質の存在状態を知ろうという方向での仕事が活発に行われている。

質量分析や、CD、ESR等を用いた報告も多く、これらの機器を如何にして複合脂質や生体膜等の解析に応用していくかという世界の動向を知る上では良い機会であった。ただ、NMRを始め、これらの技術は実際に使っている者でないと概念以上のことはわからず、“高嶺の花”、“魔法の小杖”的なところがあって議論になりにくい嫌いがある。

第二のトピックはリン脂質の代謝における疎水基と親水基の影響ということであったが、“boundary lipid”が論点であったように思われる。この6~7年に展開された領域で、生体膜中の脂質には流動相以外に、タンパクと強く結合した硬い相の2相があって膜機能の発現に重要な役割を果たしているとする説で、種々の lipid-protein 相互作用について報告が行われた。この分野ではESRはもとより、NMRも威力を発揮している。

その他のトピックとしては lipoprotein の物性やリン脂質、胆汁酸等との相互関係に関するもの、脂質の代謝に関する諸酵素の話、脂肪酸生合成の調節機構といった発表が行われている。

学会はケルン市の公会堂とも言うべきギュルツェニヒというコンサートホールの中で行われたが、招待講演以外は3会場が並行して進められたために、聞きのがしてしまった演題も少なくない。殊に抄録やプログラムが登録の際に手渡されたということもあって、帰国後になって聞いておけばよかったと思う発表もあった。この会は proceeding を出さないで、せめてプログラムだけでもあらかじめ入手できればよかったと思っている。今後、日本において国際学会を主催される

方々はプログラムの早期配布を心がけるべきであろう。

快適な学会場の雰囲気と共に、第一日目の夜、大聖堂で行われたオルガンリサイタルは参加者全員に対する最適なプレゼントであった。ゴシック建築のドーム全体に響き渡る音色に聞き入る時、昼の疲れを忘れ去る思いがした。

第22回のICBLは1980年5月26日から3日間、イタリアのミラノ市でGalliの主催で開かれることが決っているが、今回との間に半年しか間隔がないという、国際学会としては異例のことと思われる。1981年の第23回ICBLはオランダで開かれる予定と聞いている。

日本脂質生化学研究会シンポジウム

“膜の流動性・変化”に出席して

東大・応微研 川口昭彦

膜の研究に従事している研究者は、直接的間接的を含めれば相当な数となるであろう。例えば、生化学の毎号巻末にある生物科学ニュースカレンダーを見ると、毎月、日本のどこかで“膜の……”の表題がついた集会が開かれているようである。昨年7月、トロントで開かれた第11回国際生化学会でも膜に関するセッションやシンポジウムが多かった。因に、この会議に使われた2つのシンボルマークは、いずれも脂質二重層をあらわしたものであることを考えても、組織委員の意図が、よく理解できる。この本会議にさきがけて、膜の流動性の調節に関するサテライトシンポジウムが開かれた。そこでサテライトシンポジウムの内容も適当に引用しながら、脂質生化学研究会のシンポジウムの感想をまとめてみたい。

このシンポジウムの演題内容を大別してみると、膜脂質の組成変化と流動性の調節、環境適応と膜脂質の調節機構、脂質修飾と膜機能の解析の3つのカテゴリーに分けられる。紙面も限られているので、筆者の偏見と独断により、第2のカテゴリーの研究について、問題点を考えてみたい。このカテゴリーの中での1つの争点は、微生物の生育温度変化に対応した膜脂質の分子種組成の調節機構であろう。この調節機構は、アシルトランスフェラーゼ系が主役とする説と、アシル供与系(脂肪酸合成系)が主役とする説がある。さらに、アシル供与系の調節に

ついても、脂肪酸合成系の酵素活性レベルの調節と、酵素（特に不飽和化酵素）の誘導合成による調節の2つが考えられている。Fulco（UCLA、サテライトシンポジウム講演）は、*Bacillus megaterium* を材料に用いて、低温シフトに伴って不飽和化酵素の活性変化と、 $[^3\text{H}]$ アミノ酸のタンパク質への取り込みが一致する結果から、低温適応には、不飽和化酵素の誘導合成が起っていることを推論した。また、テトラヒメナでも、不飽和酵素の合成が、低温誘導を受けることが、すでに示されている。これに対して Thompson（テキサス大、サテライトシンポジウム講演）は不飽和化酵素の活性レベルが調節されているという立場から、膜流動性の変化と酵素活性の相関性を論じた。また、大腸菌や *Brevibacterium* では脂肪酸合成系の酵素自身が温度に対応して飽和酸と不飽和酸の比を調節している。このように諸説が、入乱れているように思われるが、それぞれの説が、すべての現象を説明できるわけではなく、各々弱点を持っている。したがって、各人が扱った材料あるいは、データ処理の仕方によって、一面だけが強調されていることは否定できない。生物が環境変化に対して、正常な状態を保持するためには、幾重にも調節機構が働いているはずであるから、上記の複数の機構が絡み合って機能しているのではないかと考えられる。

脂質生化学研究会のシンポジウムでは、微生物を用いた研究が大部分で高等動物細胞の膜脂質の調節に関する研究が少なかったのは残念であった。トロントのサテライトシンポジウムでは、いくつかの高等動物細胞を用いた研究が発表された。例えば、ラット肝のミクロソームの脂肪酸組成、流動性および不飽和化酵素活性が、飢餓や再摂食によって変化する事実や、ラット肝の培養細胞を用いた、リン脂質の極性基の調節の研究が発表された。微生物は環境条件を変えやすく手軽な材料であり、有意義な結果が数多く得られた。しかし今後は高等動物を用いた研究の進歩も期待したい。

最後に、シンポジウムの運営について触れたい。シンポジウムの企画は、“いかにしたら hot discussion ができるか？”という問いかけにより、第20回研究会から始まったものと記憶している。第1回目は Round table 方式で行われたが、今回は形式を変えて行われた。今回は、オーガナイザーの方が予め、

質問者を依頼して、discussion を induce されるように努力され、充分その効果はあったと思う。さらに、この discussion の輪を広げるためには、詳細なデータまで書いてある予稿集を講演者も聞き手も、もっと有効に利用することを考えなければならないであろう。

以上思いつくまゝに感想を書かせていただきましたが、国際生化学会のサテライトシンポジウムと比較しても決して見劣りのしない内容で充実した半日であった。最後に本シンポジウムを企画・運営していただいた、野島先生、野沢先生、渋谷先生および事務局の方々に深く感謝いたします。

International Conference on the Biochemistry of Lipids
(ICBL) について

東大・医 山 川 民 夫

われわれの日本脂質生化学研究会(JCBL)のいわば原型であるICBLについては、その創設の頃、安田会長にさそいがあって原、大野、舟橋の諸氏や小生などが会員になっていたこともあったが、日本から遠くはなれたヨーロッパでの学会組織でもあり、過去、何人かの方が、時折出席した程度で本態をよく知っている方は少ない。たまたま、1979年夏、ケルンでの第21回ICBLに出席した機会に、いくつかの資料を手に入れたので紹介かたがた記録しておきたい。

ICBLのなりたち (1978年5月、Tritten編集による News Letter
版1より)

第1回ICBLはGent(ベルギー)のR. Ruysse教授の主唱で1953年ブラッセルで開催されたが以来25年間毎年ヨーロッパのどこかで開かれ、世界各地からの脂質生化学者の集会になっている。

発足時よりICBLは全くinformalな組織で各回のChairmanは集会と組織の全責任をもつものであるが本部事務局が必要となり1965年まではRuysse教授が幹事役になっていて、その年に運営委員会(Steering Committee)が出来た。

委員会の主な任務は各年次の委員長(Chairman)を指名することであるが、それでも継続的な仕事として直接に各国の脂質生化学者に情報を提供する必要があって、このNews Lettersをつくることにした。これは適時発行されるものである。

運営委員会委員 (1978年1月より)

L.L.M. van Deenen(Utrecht) 委員長(Chairman)

B. Borgström(Lund) 委員(Member)

P.A.E. Desnuelle(Marseille) 委員(Member)

A.R. Johnson(North Ryde, Australia) 連絡委員(Corresponding Member)

W. Stoffel(Köln) 臨時委員(Temporary Member)

J. Boldingh(Vlaardingen) 事務局長(Secretary)

1978年はベルギーのBruggeでH. Peeters博士が主催する予定であったが研究室の変更の理由で開催不能となり残念であった。従って第21回は1979年ケルンでStoffelが主催する。

ICBL Business Meeting (1979・8・29 ケルンにて)

小生はたまたま当夜ケルンに着いた所、何も判らないまま、この会に出席させられた。幸に沼正作教授もおられたが、ワインを飲みながら深夜に及ぶ会であったので、多少あやふやな点もあるが報告する。

出席者 (敬称略)

E. Aaes Jørgensen(コペンハーゲン); D.G. Bishop(シドニー)

B. Borgström(Lund); R.R. Brenner(ラブラタ); H. Debusch(ケルン);

L.L.M. Van Deenen(ユトレヒト); P.A.E. Desnuelle(マルセイユ);

G. Galli(ミラノ); G.A. Garton(アバデーン); G.H. de Haas(ユトレヒト);

J. Knudsen(オデンセ); S. Numa(京都); F. Paltauf(グラーツ);

J. Polonovski(パリ); G. Porcellati(ベルジヤ); S. Rous(ジュネーブ);

W. Stoffel(ケルン); B.H. Tritten(ブラデング); Yamakawa(東京) .

(1) まず Van Deenen 議長としての歓迎の挨拶があり、

(2) 事務局長の Tritten から (a) 前回の Business Meetings の議事報告 (b) News Letters (第1回) の頒布情況 (c) 財政状態 の報告。

(3) 20回ICBL(Aberdeen, 1977)の報告

Garton から132人の出席者があり、宿泊はキャンパス内で行われ120ポンドの繰越金。

(4) 21回ICBL (Köln, 1979)

Stoffel から明日行われる集会の予告が行われ、あまり宣伝しなかったが、250名以上の出席が見こまれる。ポスターはやらない。

更に議長から Bergelson 教授を招待したがソ連政府の許可が得られず強く抗議をしたい旨発言があった。(この件は後に大会参加者の署名を集めてソ連アカデミー宛遺憾の意を表した。)

(5) 22回ICBL (Milano, 1980; 5.26~28)

世話人は G. Galli と R. Paoletti

トピックは (i) Cholesterol and bile acid metabolism

(ii) Fatty acid metabolism and nutrition

(iii) Lipoprotein lipases

各セッション5人の招待講演、他に口頭とポスター発表、午後 5月1日

連絡先: Ms. Brita Rolander Chilo

Nutrition Foundation of Italy

Via San Pietro All'Orto 17

Milan 20122, Italy

Tel 709514

(6) その後のICBL予定

第23回を1981年9月始、コペンハーゲンで; 世話人は Jørgensen と

Knudsen; トピックは (i) Biosynthesis of fatty acids

(ii) Fatty acid metabolism and nutrition (iii) Membrane-bound enzymes

第24回ICBL (シドニー, 1982) 議長からオーストラリアの連絡委員 Johnson 教授との話合いの結果1982年8月15~21日 Perth で IUB の第12回会議がある際にサテライト集会として行い予定と報告された。一般トピックとして「植物脂質」が提案されている。ヨーロッパからは遠いが、アジア、オセアニア地区、アメリカの人々には魅力があるのではないか、IUB の会議では

脂質代謝は行われないので援助して貰えるであろう。なお1982年にはヨーロッパではICBLはやらない。ヨーロッパ以外でICBLを行うことは規則に反しない。詳細は Bishop 教授に委任された。

第25回ICBL (ベルギー, 1983; 25周年記念)

第1回がベルギーで開かれたので如何かと諮られたが承されたがベルギーの代表者が不在なので後程議長が交渉に当る。なお第15回FAOB会議がブラッセルである。

第26回ICBL (ジュネーブ, 1984)

前回のアバデーンでの会議の時、スイスが既に示唆されていたのでRous 教授が承諾の意を表した。

第27回ICBL (スカンジナビア, 1985)

フィンランドかノルウェイかがどうかといわれたが代表者が不在なので後刻議長が交渉する。

(7) ICBL と他の会議との関係

期間やプログラムの関係をFEBSやIUBとはVan Deenen; ISFとはR. Marcuse (Göteborg) が連絡調整する。これに関して最近ISF (国際油脂会議) が生化学に興味をもって来ているので協力関係をもつことの示唆があった。

「植物脂質」については従来ICBLとしてあまり重視していなかったが、植物脂質の生理化学の進歩に関する集会在隔年行われており(世話人Appelqvist) それとの関係をどう考えるかの議論がありシドニーの会議のトピックの事もあり、議長が、それとの交渉に当ることとなった。

なお各国で行われている脂質生化学の会に関しては早目にICBL事務局に連絡することや、各国の学会組織の代表者または連絡者の名をTritten宛に通告することがきめられた。

(8) 運営委員会の組織

1978年1月1日より Van Deenen が A.T.James に代って委員長になった。任期は約5年。

1965年以来、事務局長 (Secretary) であった J.Boldingh は引退し、Ing.B.H.Tritten (Managing Secretary, Unilever Research Vlaardingen, The Netherlands) が就任、任期は1979~1981年。

“永年”委員であった Borgström と Desnuelle 両教授は後進に道を譲ると申出た。議長はその功績を讃えと共に、これまでの制度を改め、運営委員長 (Chairman) が毎年変るのをやめて、しばらく続ける。“永年”委員もはや必要がなくなったので、もっと国際的な構成にしたらいという感じになった。

そこでも夫々第19,20,21回の I.C.B.L. の Chairman であった Polonovski, Garton, Stoffel に運営委員会委員になることが提議され了承された。

同席していた Brenner と山川は夫々南米と日本の連絡委員 (Corresponding members of Steering Committee) にさせられ、北米地区の連絡委員は議長が探すことになった。(但し山川の任期は2年でその後は沼教授に受けつがれることになった。)

(9) その他

I.C.B.L. の今後の通知は J.Lipid Res. に掲載されることが勧告された他 I.C.B.L. が大きくなりすぎると形式的になり効率がわるくなる危険があるので、なるべく informal なものでありつけよ。演題の提出を断るよりも、トピックを限る方がよい、などが発言された。

(10) 閉会

次回はコペンハーゲンの第23回 I.C.B.L. の時に開催する。

過去における I.C.B.L. など学会の開催状況

	I.C.B.L.	I.S.F.	F.E.B.S.	I.C.B.
<1952				1. ?
1952				2. Paris
1953	1. Brussels			
1954				3. Brussels
1955	2. Ghent			
1956	3. Brussels	1. Milan		
1957	4. Oxford	2. Paris		
1958	5. Vienna	3. Sevilla		4. Vienna
1959		4. Cannes		
1960	6. Marseille	5. Odansk		5. Moscow
1961				
1962	7. Birmingham	6. London		
1963	8. Stockholm			
1964		7. Hamburg	1. London	6. New York
1965	9. Noordwijk		2. Vienna	
1966	10. Cologne	8. Budapest	3. Warsaw	
1967	11. Jerusalem		4. Oslo	7. Tokyo
1968	12. Loughborough	9. Rotterdam	5. Prague	
1969	13. Athens		6. Madrid	
1970	14. Lund	10. Chicago		8. Switzerland
1971			7. Varna	
1972	15. The Hague	11. Göteborg	8. Amsterdam	
1973	16. Nottingham		(spec.) Dublin	9. Stockholm
1974	17. Milan	12. Milan	9. Budapest	
	(9-12 Sep.)	(2-7 Sep.)	(25-30 Aug.)	
1975	18. Graz		10. Paris	
	(9-11 July)		(21-25 July)	
1976	19. Paris	13. Marseilles	Symp. Zürich	10. Hamburg
	6-8 Sep.	30 Aug.-4 Sep.	(18-23 July)	(25-31 July)
1977	20. Aberdeen		11. Copenhagen	
	(6-8 Sep.)		(14-19 Aug.)	
1978	-	14. Brighton	12. Dresden	
		(18-22 Sep.)	(2-8 July)	
1979	21. Cologne		Special Meeting	11. Toronto
	(30 Aug.-1 Sep.)		Dubrovnik	8-14 July
			(17-21 April)	
			"Enzymes"	
1980	22. Italy	15. USA (+AOCs)	13. Jerusalem	
			(24-29 Aug.)	
1981	23. Denmark		14. Edinburgh	
			(29 March-4 April)	
1982		16.	Special Meeting	12. Perth
			Athens 10-14 April	(Australia)
			"Cell function"	(15-21 Aug.)
1983			15. Brussels	
1984		17. India ?	16. Moscow	
1985			Special Meeting	13. Amsterdam ?
			Portugal	
1986				
1987				
1988				

日本脂質生化学研究会会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学研究会 (Japanese Conference on Biochemistry of Lipids, JCBL) と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展、向上を図り、あわせ研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために次の事業をおこなう。

- (1) 研究討論会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者
- (3) 名誉会員をおくことができる。名誉会員は幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員

本会は、その運営のために次の役員をおく。

- (1) 会長1名、庶務幹事1名、会計監査1名、幹事若干名をおく。
- (2) 会長、庶務幹事、幹事は幹事会を構成し会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (3) 会長、庶務幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたげない。

- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長は幹事会に出席して意見を述べるることができる。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するため、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、1月1日より翌年12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は会計監査によって、監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員に便宜を供する。

附 則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。
- (3) 本会の事務局は、帝京大学医学部生化学教室に置く。

(平 173) 東京都板橋区加賀 2-11-1

編 集 後 記

昨年にひきつづく暖冬と思っていたら、この二、三日急に寒くなり、東京でも氷がはり、研究棟屋上のクーリングタワーにつららが下がっています。

イタリアで開催されるICBLの申し込み用紙が、北大の今井教授から回送されてまいりましたので、申し込みの間に合うよう、1ヶ月発行を早めました。

今年の研究集会は夏休みになってから岐阜大学医学部で開催されます。この時期は岐阜市内に宿をとるのが大変困難になるそうです。この会報を受けとったらすぐ予約をしてください。宿泊の事情は我々の想像を絶するようで、お世話くださる高橋教授が大変心配して居られました。

どうしても岐阜市内に宿がとれなければ、名古屋市内からでも通えますが、名鉄で40分、更にタクシーで5分程度、それ相応の交通費がかかりますので、できるだけ早く岐阜市内に宿を確保してください。

(記 植田、福島、島崎)

賛 助 会 員 (50音順)

エーザイ株式会社
株式会社大阪細菌研究所
株式会社大塚製薬
小野薬品工業株式会社
共立出版株式会社
三共株式会社
塩野義製薬株式会社
株式会社資生堂
第一製薬株式会社
大日本製薬株式会社
株式会社東京化学同人
東京田辺製薬株式会社
富山化学工業株式会社
株式会社中山書店
日本新薬株式会社
日本凍結乾燥株式会社
日本ルセル株式会社
藤沢薬品工業株式会社
株式会社ヤクルト本社
山之内製薬株式会社
雪印乳業株式会社

以上 21 社